別記様式第７号

# 学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

| | |
|---|---|
| １．申請者氏名 | 山　中　慶　子 |
| ２．審査委員 | 主　査：（岡山大学教授）　清　田　哲　男<br>副主査：（上越教育大学教授）　松　尾　大　介<br>委　員：（兵庫教育大学教授）　淺　海　真　弓<br>委　員：（岐阜大学教授）　山　本　政　幸<br>委　員：（岡山大学教授）　早　川　倫　子 |

３．論文題目

造形行為を伴う遊びを視座とした遊びと学習との質的な相関についての研究

４．審査結果の要旨

教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座　山中慶子氏　から申請のあった学位論文について，兵庫教育大学学位規則第１６条に基づき，下記のとおり審査を行った。

論文審査日時：令和８年２月１１日（祝｜水）１１時００分～１１時３０分

場　　所：対面及びZOOMによるハイブリッド実施

対面での場所　岡山大学　教育学部　本館４階４０１教室

**１．学位論文の構成と概要**

＜本論文の構成＞

序章　研究の背景と概要

第１節　研究の目的と動機／第２節　研究の構成と内容／

第３節　本研究の方法とデザイン／第４節　調査における倫理的配慮

第１章　「造形行為を伴う遊び」からみた子どもの姿

第１節　本章の目的と研究の視座／第２節　幼児教育と小学校教育との接続の背景／

第３節　幼児教育と小学校教育における学びの考え方／

第４節　「遊び」と「学習」との関係についての仮説／

第５節　幼児の「造形行為を伴う遊び」の観察調査結果／第６節　仮説の検証／

第７節　第１章の成果と課題

第２章　幼児期の遊びの好みと教科学習への興味との関係

第１節　人の「興味」と「学習」との関係／

第２節　「造形行為を伴う遊び」の好みの違い／

第３節　調査方法／第４節　仮説／第５節　結果／第６節　考察／

第７節　第２章の成果と課題

第３章　幼児の発達過程における環境との関わりの傾向

第１節　本章の目的／第２節　調査方法／第３節　調査結果／第４節　考察／

第５節　第３章の成果と課題

第４章　幼児後期の他者模倣と学びとの関係

第４章　幼児後期の他者模倣と学びとの関係
　第１節　本章の目的／
　第２節　第1調査：幼児と材料との関係に保育者の行為が与える影響／
　第３節　第２調査：造形表現での模倣にみる幼児と環境との関係の変化／
　第４節　第４章の成果と課題
第５章　幼児期の「遊び」と能動的な「教科学習」にみる構造の共通性
　第１節　本章の目的／第２節　幼小の子どもを連続して見る視点／第３節　調査方法／
　第４節　結果／第５節　幼児期と児童期との比較・検討（U児・M児）／
　第６節　考察と仮説（第１章）の検証／第７節　第５章の成果と課題
第６章　保育者と教師による子どもの学びの考え方
　第１節　本章の目的／第２節　幼児教育と小学校教育が目指す子どもの姿／
　第３節　調査方法／第４節　結果／第５節　考察／第６節　第６章の成果と課題
第７章　総合考察
　第１節　本研究の知見の総括／第２節　今後の幼少接続の検討に必要な視点／
　第３節　今後の幼小接続を，「遊び」と「学習」との関係から考える
　第４節　推論：「遊び」は「学習」によって，いかに変化していくのか？／
　第５節　本研究の意義／第６節　今後の課題

＜本論文の概要＞

本研究は，幼児期の遊びの経験や興味関心が，小学校低学年期の学習へと接続するプロセスを調査・分析することで，幼小接続期の「遊び」と「学習」との質的な相関を明らかにするものである。そのため，12 名の子どもの連続した幼小２年間の縦断的調査により，「遊び」と「学習」との活動の共通性について検討を行った。そのことで，今後の幼児教育と小学校教育との接続において必要な，保育者・教師による子どもの成長を捉える視点や姿勢について明確にすることを試みている。

近年の教育課題として，幼小の連携の強化が挙げられる。しかし，児童が小学校生活にうまく適応できない「小１プロブレム」に代表されるように，個々の連続した学びから派生する問題の究明には至っていない。その理由の一つに，子どもが主体的に遊びや学びに興味を持とうとする姿が，幼児期と児童期とで保育者・教師によって切り離されて捉えられていることが挙げられる。そのため，幼小の子どもの姿を分断することなく精緻に観察・分析することによって，「遊び」と「学習」をつなぐための具体的な知見を得ることが喫緊の課題だと考えるに至った。

本研究では，幼小接続のための視座として「造形行為を伴う遊び」に着目した。それは，「人―もの」との双方向的な関係へと目を向けるマテリアル・ターンの考え方を通して，幼小の子どもの連続性を見取ることに拠るためである。幼児にとって，ものの特性を知り，自分の生活の中で素材を操作することは，自己の世界を広げ，自己形成をしていくことを意味する。つまり，幼児期の「造形行為を伴う遊び」による子どもへの追究は，図画工作科への接続だけでなく，マテリアルを介したすべての学習を包括する幼小接続の視座となる可能性があると考えられる。

第１章では，幼児教育と小学校教育の関係を歴史的な背景から調査するとともに，先行研究の整理から，幼小の子どもの「遊び」と「学習」との質的な相関について，「幼児期に面白さを見出した環境との関わりは，類似した領域での学習に影響を与える」，「イメージを視覚化する『遊び』の過程で，目的を自主生成するような『学習』の素地が培われる」の二つの仮説を導きだした。

第２章では，子どもの「造形行為を伴う遊び」への興味と教科学習への興味とに関連があるのかを明らかにすることを目的とし，小学校低学年児対象の質問紙調査を実施した。その結果，①子どもの好む「造形行為を伴う遊び」の特性と，選好教科の学びの特質や学び方に相関性があることが示された。

第３章では，発達過程における環境との関わり方の傾向を明らかにすることを目的とし，牛乳パックピースを用いた実験的観察調査を行った。その結果，幼児は成熟と経験を重ねるにつれ，社会的な意味をもった他者との相互行為を通して，遊びや表現行為を決定していることが示された。

第４章では，幼児期の模倣行為について二つの調査を行った。第一に，幼児が保育者を模倣する行為の観察調査から，模倣による学びについて考察を行った。その結果，①幼児と材料との出会いの場における保育者の行為は，その後の幼児と材料との関係に影響を与える，②価値ある目的に向かって自らの可能性を追求しようとするとき，幼児は他者を模倣することによって新たなことを学ぶことが示された。第二に，友達関係の変化に伴う模倣行為について，年長女児２名の遊びを１年間観察調査した。その結果，幼児の相互模倣の機能には，①自身のシェマの変容・発展，②他者との関係性の構築，③関係性の中で生まれた新たな価値を共同的に表現する機能があることが示された。

第５章では，観察の視点を定め，子どもの幼児期と児童期の姿とを比較分析した。その視点とは，「感受・触発の場面」，「『共有』，『模倣』にみる他者との関わり方」である。その結果，①感受・触発の場面は，幼児期と児童期とで類似した傾向がある，②他者との関わり方は，社会性の発達という側面から変化していくことが示された。

第６章では，保育者と教師の子どもの見取りの傾向を比較分析することで，視点の違いを明らかにし，両者が１人の子どもを見取る意義について検討した。その結果，①子どもを主体として発達を見取ろうとする保育者の意識と，全体の流れから子どもの学びを把握しようとする教師の見取りの違いが明らかになった。そして，②両者の見取りの違いによって，子どもたちの多様な発達が促される可能性が示された。

第７章で，本研究全体を通して得られた知見をまとめた。本研究の成果は，校種を超えた調査により，「遊び」と「学習」の質的な相関を具体的に示すことができたことにある。そして，①能動的な「学習」と「遊び」の起点は，個によって異なる＜感受・触発＞である，②「学習」と「遊び」の共通項は，目的を自主生成することにあることが明らかになった。これにより，今後の幼小接続を「遊び」と「学習」との関係から見るための三つの視点が得られた。

a. 幼小の違いを肯定的に捉え，共通して子どもの感受・触発の素地を育む視点
b.「遊び」と「学習」の動機を重なりとして捉える視点
c. 多様な価値（保育者と教師の見取りの違い）が子どもの成長を促すという視点

さらに，本研究の知見からは，幼児教育と同様，小学校教育におけるマテリアル・ターンの考え方に基づく物的環境の必要性が示された。

## ２．審査経過

本論文の主要部分は，７編の全国学会誌の査読付き学術論文から成っている。美術科教育学会誌『美術教育学』（単著，第45号，2024年），大学美術教育学会誌『美術教育学研究』（単著，第56号，2024年），兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科『教育実践学論集』（単著，第26号，2025年），大学美術教育学会誌『美術教育学研究』（単著，第57号，2025年），美術科教育学会誌『美術教育学』（単著，第46号，2025年），日本美術教育学会誌『美術教育』（単著，第310号，2026年），大学美術教育学会誌『美術教育学研究』（単著，第58号，2026年掲載予定）である。これらの研究成果を基に，博士論文を纏めている。以上の成果と内容について，５名の審査委員が討議した観点は，以下の通りである。

### （１）研究の目的と論文構成との整合性について

本研究では，幼児期の遊びの経験や興味関心が，小学校低学年期の学習へと接続するプロセスを調査・分析することで，幼小接続期の「遊び」と「学習」との質的な相関を明らかにすることを目的としている。そのための視座として，幼児の「造形行為を伴う遊び」に焦点化した。

それは,「人―もの」との双方向的な関係へと目を向けるマテリアル・ターンの考え方を通して,幼小の子どもの連続性を見取ることに拠るためである。そして，実態に基づく検証を行うために，２年間にわたる12名の子どもの幼児期の「造形行為を伴う遊び」及び児童期の「教科学習」の観察調査，及び一つの質問紙調査，二つの実験的観察調査を実施し，その結果について考察している。

第１章では，幼児教育での領域の考え方と，小学校教育での教科学習の考え方について理論研究の先行文献を基に検討し，遊びと学習との関係について仮説を立てている。第２章では量的な調査によって仮説を検証し，第３章から第５章では，幼児期の「造形行為を伴う遊び」と，児童期の「学習」について同じ子どもの２年間を質的に観察調査することで本研究課題について考察を行っている。第６章では，保育者・教師による子どもの見取りの違いについて調査分析を行っている。第７章では，これらの結果を基に，遊びと学習との質的な相関について以下のように結論付けている。①能動的な「学習」と「遊び」の起点は，個によって異なる＜感受・触発＞である。②「学習」と「遊び」の共通項は，目的を自主生成することにある。これらの結果から，今後の幼小接続を遊びと学習との関係から見るための三つの視点を導きだし，小学校教育におけるマテリアル・ターンの考え方に基づいた環境構成の必要性について明らかにしている点において評価できる。

（２）研究の独創性について

本研究では，幼児期～児童期に移行する子どもの２年間に焦点をあて，12名の子どもの「造形行為を伴う遊び」と「教科学習」の姿を継続的に観察調査することで，遊びと学習との質的な相関について考察を行っている。また，「造形行為を伴う遊び」と「教科学習」への興味の偏りの傾向を調査するために，小学校低学年児185名を対象とした量的な調査を実施している。さらに，研究対象を保育者・教師にも広げ，子どもを見る人の見取りの側面からも幼小接続について考察している。同じ子どもの２年間にわたる継続的な調査と質的分析，質問紙調査による量的分析，保育者・教師の見取りという多角的な視点から幼小接続について検討は，これまでの研究手法では前例がなく，極めて独創的であると評価できる。

（３）今後の発展性について

終章である第７章では，子どもの「遊び」と「探究」と「学習」には深い関連があることについて述べている。そして，今後の課題として「幼小接続期以降の子どもの姿の調査から『遊び』と『探究』と『学習』との関係について検討を行う」ことを挙げている。よって，博士課程での研究を基礎としながら，未来を生きる子どもたちのために理論と実践の往還による，さらなる研究を深めていこうとする本研究の今後の発展性について期待できる。

（４）学校教育の実践への貢献について

幼小の子どもの観察調査に基づく考察から，遊びと学習の質的な相関について，①能動的な「学習」と「遊び」の起点が，個によって異なる＜感受・触発＞，および，②「学習」と「遊び」の共通項が，目的の自主生成であることを明らかにした。そして，保育者・教師の見取りの違いを明らかにし，そのことによって，子どもたちの多様な発達が促される可能性に言及した。

遊びと学習の関係を具体的に明らかにし，それによって，幼小接続を遊びと学習との関係から見るための視点を得たこと，小学校教育におけるマテリアル・ターンに基づく物的環境構成の必要性を示したことは，学校教育の実践への貢献に寄与するものと期待できる。

３．審査結果

以上により，本審査委員会は　山中慶子　の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し，全員一致で合格と判定した。